

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	令和元年度第1回高松市創造都市推進審議会
開催日時	令和元年7月19日(金) 14:00~16:00
開催場所	丸亀町レッツホール
議 題	(1) 第2次高松市創造都市推進ビジョン策定後の取組状況について (2) 事前回答テーマを踏まえた今後の取組について (3) その他
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	佐々木会長、出木浦委員、西成委員、三井委員、小池委員、中西委員、平野委員、橋本委員、原委員、三野委員、篠田委員、グルネウォルド委員、西村委員、渡邊委員
事務局	長井創造都市推進局長、多田創造都市推進局参事、田井経済産業部長、一原文化・観光・スポーツ部長、西岡産業振興課長、佐野産業振興課長補佐、太田立地・創業・イノベーション支援室長、十河農林水産課長、六車市場業務課主任主事、岩部施設整備室長補佐、津森観光交流課観光振興係長、吉峰観光エリア振興室長、丸山スポーツ振興課長補佐、松本産業振興課主幹、三浦産業振興課創造産業係長、松下産業振興課主事
傍聴者	1人 (定員 10人)
担当課及び連絡先	産業振興課 創造産業係 839-2411

審議経過及び審議結果

1 開会及び事務局体制の紹介等

【会長】

梅雨らしい季節になってきたが、昨日、京都で大変痛ましい事件が起こった。アニメーションは日本が誇る創造産業のうちの一つであり、特に、若い才能のある方が亡くなられたことは、大変、残念だと思っている。早速、フランス大使館からお悔やみが出ていたが、フランスでは非常に日本のアニメ作品が評価されており、そのことの表れだったようにも思う。

今日はまず、議題(1)で創造都市・高松の事業が着実に進展してきているので、昨年の実績について報告いただき、議題(2)で事前に回答いただいた「議題とすべきテーマ」を中心に議論をしていく予定である。それでは、昨年度の実績について事務局から報告をお願いしたい。

2 議題（１）第２次高松市創造都市推進ビジョン策定後の取組状況について

（事務局から配布資料について説明）

【会長】

只今、概要版である資料1を基に説明いただいたが、各プロジェクトに関係する委員から、事務局からの説明について補足あるいは質問等を伺いたいと思う。それでは、まず「こどもプロジェクト」についてはいかがか。

【委員】

私の会社は、地域スポーツとして野球に携わっているが、他のスポーツチームとの交流もあり、理事会等で意見交換をする機会を作っている。その中で、集客を増やすことや、子どもたちにどう根付かしていくかということがずっと議論され、できることや難しいことを共有させていただいている。良い点として一つ挙げると、各チームともに開催時期がずれているので、観戦者の奪い合いは発生しないと思われるが、それでも全体的に集客が減少している中で、何かできることはないか我々は常に話し合っている。例えば、感動というものは、自分ができるようになる感動や家族に対する感動と、いろいろな種類がある中で、スポーツに対する感動も本当に言葉にしがたいものがある。それをどのように地域の方々や子どもたちに伝えていくかという時に、実現可能性を考えずに、例えば、試合の開催を平日の日中にして、遠足などの機会です足を運んでもらい、少しの時間でもいいのでスポーツ観戦の機会を作ることができないかという話を我々は常に行っている。地域や子どもたちに根付くというところでは、今、スポーツも本当に多様化しているが、この小さな香川県の中にスポーツ球団が4つもあり、全国一位を獲っているチームもあることは、本当にすごいことであり、球団のPRだけでなく、そういったことも周知していくためにも、学校訪問等は続けていきたいと考えている。

【会長】

来年、オリンピック・パラリンピックが東京で行われることもあり、全国的にスポーツ分野での取組が多い中で、高松ではトップスポーツチームというものが幼稚園や保育園にも展開しているという実績がある。「こどもプロジェクト」について、他に御意見はあるか。

【委員】

資料3の中で我々が取り組んでいる「芸術士派遣事業」について紹介されており、予算規模や活動件数について皆様に御理解いただいたと思う。この事業は、高松市から始まって10年になり、他市町村からいろいろな問い合わせがあるが、なかなか実施までには至っていない。去年は、世田谷区から依頼があり、担当者の方々などが見学に来られたが、世田谷区は高松市の倍ぐらいの人口があり、いろいろなことを考えていることもあるのか、いまだに実現に至っていない。それを思うと、高松から奇跡のように始まり、奇跡のように10年続いていると思っているが、我々としては、そのことをもっともっとPRしたいと思って

いる。最初の3年が実績となり、そこから予算も増え園数も増えてきたが、ただ同じことをずっとやっていると、市の財政の中ではマイナスシーリングもあり、今年も30万減額になっており、園数も人員も減らせないので、その減額分である事業を辞めた。そういったことに直面し、市には、一部、受益者負担のような形にするようなお金の流れの仕組みを変えてはどうかということを提案している。そろそろ、やり方を見直してもいいように考えている事業である。

#### 【会長】

実は今朝ほど、ある保育園に伺って、アーキペラゴから派遣されている芸術士の方が、多くの現場でどういう活動をされているのかを見させていただいたが、子どもたちも非常に目の色が変わり、しかも、長い時間集中していたのがとても驚いた。この事業は、高松市オリジナルの事業だが、もともとはイタリアのレッジョ・エミリア市の保育園での取組が全世界で広まったもので、その取組は今、ハーバード大学でもその効果測定をしているというところまで来ている。その取組を現地視察して高松版の事業として取り入れた。私としては、とても素晴らしい事業になったと思っているが、なぜこの事業が日本全国にすぐに広まらないのかと疑問に思っている。それは国の取組とか、県の取組とかこれからの課題になるだろうが、先ほどのスポーツの話でもそうだが、市民の創造力を伸ばすには子どもの時から取組まないといけないので、そういう意味では、芸術やスポーツを子どものころから伸ばすということは、創造都市・高松の基幹的な事業として、いろいろと工夫されながらぜひやっていただきたいと思う。

次に、「工芸プロジェクト」の中で盆栽の事業が掲載されているが、どなたか御意見はあるか。

#### 【委員】

「工芸プロジェクト」の主な成果として、盆栽について掲載していただいているが、ここに掲載されているのは組織的に参加させていただく事業であり、もう既に着工しており来年度には完成する予定であるが、今の段階では箱モノだけなので、運営する組織とかが大事になってくると思われる。

個人的には、今、盆栽については、御多分に漏れず、外国の方が非常に多い。実際には、団体や個人業の方に訪れていただいているが、最近、高松港にクルーズ船が非常に多く入ってきており、クルーズ船の方の御客様が非常に増えている。ツアー会社から問合せがあるので受入れしており、問合せの中でも「富裕層の方が多し」とおっしゃってくださっているが、盆栽は輸出に制限があり、植物防疫所の検査を受けなければならないため、対面での販売は非常に難しい状況である。交流人口というか、そういう出会いはあって、我々は5年前、10年前から、盆栽の普及になればという気持ちをもってそういった受入れをさせていただいているが、やはり伝統というものは継承していかなければならず、対価ももらいつつ収入も得ながら、現実的に次の世代に移していくという、どうにか生産性を上げるという段階に入ってきており、「どのように生産性を上げるか」という課題にみんなで考えているところである。6次産業化というか、盆栽を見ながらカフェの運営や宿泊とかいろいろあるかもしれないが、そういった分野に入っていくか、若しくは、職人として一次産業で極めていくかという非常に悩ましいところで悩んでいる方もいる。例えば、外国の方に、体験や鑑賞をさせていただいて

対価をいただくとか、何かしら生産性を上げていくことが喫緊の課題としてある。

【会長】

高松を代表する産業にしていく、あるいは、ビジネス化というところで大きな展望があると思う。

次に、「食プロジェクト」について、資料1では「たかまつ市場フェスタ」について掲載されているが、食に関する取り組みについて御意見はあるか。

【委員】

資料1では、「たかまつ市場フェスタ」が掲載されているが、事前に送付いただいた資料を改めて見ると、食に関する事業が非常にたくさんあると感じた。市場の方々の取組でいうと、香川県の野菜のブランドを立ち上げたいという形であるところ、来週も京野菜の事務局お話を伺いに行ったりして、そういった野菜ブランドが定着しているところの事例から野菜のブランドができるのかどうか、市場の方々も一生懸命、調査をしたり意見をくださっているところである。高松でいうと、「こな」というカイワレ大根のちょっと大きいものや、「食べて菜」という香川県で作った小松菜に似ている野菜や「葉ごぼう」といったものは、高松でも産地として作られているが、なかなか認知されていない。それから、食べる機会もないということで、私としては、食べる機会があると食への機会はとても広がると思っている。今日から、瀬戸内国際芸術祭の夏会期が始まったが、春会期にゴールデンウィークの女木島で、「EAT & ART TARO」氏のところでなさっていた女木島の食体験の場でありながら芸術作品でもあった、産地や作っている方々の写真・映像を見ていただいた上で、その日の料理について説明するような取り組みをされていた。単にコースをいただくだけではなく、産地や作っている人、それからその土地とのつながりといったものを目の前で見ていただいた後に食べることで、全然、脳の反応が違ったり食べたものの反応が違ったりする。高松の中でも「食べて菜」や「葉ごぼう」など、ここのまちにしかない野菜があるが、それらは消えてしまいそうな野菜でもあるので、ぜひそういう体験ができる場を、これだけのイベントがあるのでわざわざ新しく設けるのではなく、今あるものの中にそういったことを組み込んでいき、この地に根付くような形で残していけるようなことができると感じている。

【会長】

地域固有の野菜でいうと、全国各地で様々な努力がなされており、一番有名なのは山形県鶴岡市というユネスコの食文化創造都市に認定された自治体があり、そこでは「在来野菜」という言葉を使って、農家が一軒しか作っていないような規格であっても、ちゃんとブランド化して、イタリアンのシェフがおいしく食べさせるレシピが作られるという感じになっている。今、御紹介にあった京野菜もそうだし、金沢では加賀野菜がかなり使われてきているということからも、各産地固有の野菜を美味しく食べるというような形での食文化が重要になっている。こういう取組も進んでいき、これとちょうど夏会期が始まる瀬戸芸がリンクしていくと、一気に国際化していく。高松市ではそういったチャンスが、この10年で大分変わってきている。それを後押ししていくと、盆栽もそうだが、生産者と

異業種のいろんなものが交流して行って融合していく。我々の事業としては、盆栽や食を文化に広げるといった「文化に広げる」ということなの、そういった形でこれからも実績を上げていけばいいと思う。

それでは、「交流プロジェクト」に関して、特に御意見はあるか。ないようであれば、今の4つのプロジェクトにかかわらず、昨年度の実績について御意見をお願いしたい。

#### 【委員】

少し総論的な部分になるが、資料3については、前回と今回の会議でも出されており、事業が追加にもなって、現在、73の取組事業がある。その中で継続しているもの、拡充するもの、終わったものというものがあるが、この掲載の仕方自体が都市創造という視点から見ても、取組のウエイトの高さというか重要度というか、そういうような並べ方になっていない。どういう意図で並べられているか分からないが、少なくとも都市創造という視点から眺めて、それぞれの高松市の部門がやっている事業を羅列するのではなくて、そこに重要度を置いて、あるいは成果を求めるための目標をいくぐらいにするとかというふうにしないと、平成30年度の成果として実績をいただいても、これは結果論であって、何をしたからこの数字になったという記載にはなっていない。その部分が、もう少し深掘りをする必要があるし、ウエイトの高いものについて、ぜひもうちょっと議論を深めるような機会が、この場以外でもあっていいのかなという感じがした。私自身がたまたま塩江というところに関与しており、全く縁もゆかりもないところであるが、やはり地元の協力をいただいて事業をやれており、そういう意味では、一市民としての視点から見ても、空港に近い温泉というのは日本全国で見てもそんなにない。30分以内で行くことができる温泉というのはそんなにない。極端な言い方をすると、東京からでも1泊で来られるようなところにもかかわらず、インバウンドがこれほど増えながらも、5万とか6万人とかいう程度しか泊まっていない。今日、旅館組合に聞くと、収容人員としては、1日1,500人収容できるということなので、ざっと計算しても延べ50万人は最大で収容できる。そこから言うと、あまりにも6万人というのは少なすぎるし、そこに対して具体的に何をすることかということまで踏まえて、もう少しその都市創造という視点まで踏まえた、ウエイトの置き方に羅列の仕方を変えて、それに対してある程度目標を見ながら、それに対して成果としてどうだったかということをししないと、ただこれは結果論を習っていることになっている感じがするので、その辺りを検討したらいかがかと思う。

#### 【会長】

今の御意見に対して、事務局から資料作成の意図などがあればお答えいただきたい。資料1については、メリハリをつけるという意味で出していると思うが、その辺りの趣旨を確認の上で、これからもっと分かりやすくできるということであれば、それについてお答えいただきたい。

#### 【事務局】

御質問については、これに記載している事業実績や目標というところを立てて進行管理をしていくというところで、その事業が昨年度に比べてどんな状態にな

ったのかということについて、単純に分かるやり方というところで、具体的な参加者数や訪問者数とか来館者数とかいった一定の指標をもって、それぞれの事業に対してどういった状況であるということをもまずは御理解いただこうというところで作成しているところである。また、それぞれのビジョンに基づいて事業を掲載しているところがあり、どれをもって優先順位をつけるというところが客観的な指標を設定するというところが、なかなか我々としては難しいところがある。ただ、御意見の趣旨としても理解できるところがあるので、上昇しているものとかできていないものとかをさび分けながら、できていないものについては、今後、どうしていくかを考えるというところとか、指標の置き方辺りでも工夫できるものがあればしていきたいというところを考えているところである。

【会長】

資料2では、定量的なデータは示されているが、やはり、定性的というか、高松が今抱えているいくつかの問題をどう解決するかという点で、こういった見るべき成果があったということについても、資料の中でこれから先にそういったメリハリもつけていただけると良いかと思う。

3 議題（2）事前回答テーマを踏まえた今後の取組について

【会長】

総括ばかり議論するわけにもいかないの、今日の議題（2）は「議題とすべきテーマ」として、今後の取組を踏まえてどのように新しい問題に取り組むのか、あるいは、こうしたことがこれから大事になるといったことについて、事前に御意見をいただいているのでそちらに議題を移していきたい。

それでは、順番に事前回答について御説明願いたい。

【委員】

様々なプロジェクトとビジョンがある中で、今後、高松市が全てのビジョンを創造都市推進審議会を進めていく上で、創造都市推進ビジョンを含め、今ある全てのプロジェクトに対して、いわゆるSDGsの指標を取り組んで、目標設定や事業のプロジェクト成果を検証していくことで、より良い効果が発揮していくのではないかと考えている。理由としては、例を挙げると、現に北九州市が行政の事業を含め、様々なことに対して、SDGsに取り組んで、積極的に事業展開をされている。それは、行政だけでなく、市民自身のまちへの愛着であったり誇り・シビックプライドだったりを向上させることにつながるということで、取り組んでいращやる。まちは違えども、北九州市も高松市も、市民が創造的に暮らし、働き、活動できる都市、そして、住みよいまちとしていくことに対しては、誰一人取り残さない持続可能な都市・社会を創っていく必要がある。そのためには、全ての事柄に対して、社会的基準で物事を捉えていくことが大事であるということを感じて、今後、これを取り入れて活動していった方がいいのではないかと考えている。先ほど他の委員もおっしゃっていたが、何が課題でどういう目標を持っていて、成果がどうなのかということも、SDGsの17の目標を取り入れながら、検証していくことで、より市民に密着した活動を展開できるのではないかと考えており、配布資料に記載のある事業についてもそうだが、スポー

ツも食も文化も産業も、将来的に世界基準で物事を捉えていかなければ、持続可能な都市につながっていかないと思っている。併せて言わせていただくと、「交流プロジェクト」の箇所。昨年度「第29回日本パラ陸上競技選手権大会」が開催されたが、本当に良い全国大会だと思っているし、今月もパラアスリートが高松で合宿されるが、この高松が世界中の誰が来ても生活しやすいまちにいくためには、こういったことをどんどん世界目線で事を広げていくことが非常に大事だと感じている。

#### 【会長】

SDGsを創造都市推進ビジョンの中に積極的に具体化していこうという御提案である。実は、ユネスコが世界に創造都市のネットワークを提唱しており、現在、180の都市が加盟している。日本では8都市が加盟しており、高松市もある時はその加盟を検討していたが、今は、具体的に何かをするということではなくなっている。ただ、ユネスコは国連の専門委員会であり、当然、国連の大テーマであるSDGsは2015年の秋の国連総会で決まったわけだが、それを受けて創造都市ネットワークは、SDGsのうち特に「目標11」に絞っている。「目標11」の内容は、「都市と人間の住む地域は、安全で災害に強くて、創造的で持続発展できる都市」と具体的に書いている。それぞれに高松のビジョンというものは、おそらく紐づいていくわけである。御紹介のあった北九州市は、もともと公害の多発から環境未来都市に向かってきたわけだが、実は創造都市も狙っている。同じように国連のテーマに近いものを掲げているので、そういった意味で高松市が世界的な水準の創造都市を考えるということであれば、例えば、次のビジョンのところで、SDGsの項目について、それぞれどういうところができているか、どのような目標を掲げるかを考えることはとても大事だと思う。

それでは、次の事前回答について御説明願いたい。

#### 【委員】

いただいた資料を拝見して議題というよりも、質問という形で恐縮だが、一住民として屋島のプロジェクトが非常に気になっており、予算も7億も増額されているので、内容について少し伺ってみたいという趣旨である。

#### 【事務局】

御質問の屋島山上拠点施設については、全体で十数億円のプロジェクトではあるが、去年から今年度にかけて2年度間で整備をする予定だった関係で、単純に去年と今年で予算が分かれており、その配分から、今年度7億円程度増額して予算がついているということである。現状を申しあげると、拠点施設自体は、工事の入札の不調が続き、いまだ、工事業者の決定ができていない状況で、工事には着手はできていないが、今のところ、来年度中の完成を目指している。そもそも拠点施設について御説明すると、これまで屋島の多面的な魅力を一元的に紹介できるような機能がなかったわけである。パンフレットなどでは、いろんな歴史的な文化的な自然的な魅力がたくさん書いてあるわけだが、実際に、現地に行って体験できる、体感して学べるような機能がまずなかった。あるいは、雨天に来られた方が、少しゆっくりできるスペースであるとか、例えば、子どもたちが遠足で屋島の山上に来た時に、お弁当を雨の日どこかで食べたいといったときに食

べる場所がなかったわけである。そんな、もろもろの屋島の魅力を、もっといろんな人に伝えるための機能として屋島山上拠点施設というものを整備している。建物自体は、国際プロポーザルで設計者を選定して、アートとしての魅力も持ったものとして、整備をしようとしているところであり、もし御入用であれば、そのイメージパースも御提供できる。いずれにしても、いろんな人に屋島の魅力を体感してもらえるようなことをやろうと、なおかつアートの要素も取り入れて、屋島の新たな魅力の発信の拠点になるような施設をつくろうというのが屋島山上拠点施設のプロジェクトでございます。

【会長】

屋島に関連しては、他の委員からも御紹介があるようである。

【委員】

「屋島山上提灯カフェ」という今年で4年目のプロジェクトになるが、学生の方で、配布しているチラシを作成してくれており、今年はいろんな写真を載せようということで8種類ぐらい作成した。非常に、こういう綺麗な夕焼けを学生目線でPRしつつ、楽しんでいただくための場所を作っていこうということで、れいがん茶屋の閉店後にお店をお借りして取組をしている。1年目は10日間で1,000人ほど来ていただき、かなり手ごたえがあった。2年目はもっと多い2,000人ほど来ていただいて、ずっと、行列のようになってしまったので、3年目はサンドイッチ等の軽食に変更することで行列を解消し、学生の働き方改革も行った。4年目は、もっとお客さんにも楽しんでもらいながら、学生の働き方改革を進めるということで、カレーをパックにして復活させた。これらをやってみて思っていることとしては、教育機関としての大学の立場としては、4年間もやると最初1年生だった生徒が4年生になり、先輩たちを良い意味で越えようとマネジメントとして学んでいこうということが場づくりにもつながったと感じられた。正直、私としては3年目を終えたときに、一度、休憩をしたかったが、これまで続けてきた学生から、「ぜひ続けたい」との声もあって、今はかなり学生主導にしてなんとかやれている状況である。ここまで来るまでに観光交流課も含めて、現場の方も含めて、非常に多くの支援をいただいたことを改めて御礼を申しあげたい。

あと、拠点施設のことですと、非常にこれができたら変わると思っており、長崎では世界新三大夜景というのをうたっていて、かなりやり方がうまく、稲佐山の展望を作り、そこにひっきりなしに市内のバスがやってきて、みんな、夜景を見て、その後、市内で泊まるわけである。実際に、長崎にすごい経済効果を生んでいると同時に、地域資源の活用にもつながっている。私自身は屋島の夜景の方が素晴らしいと思っているが、要は、売り出し方で全く変わるので、拠点施設を作ることを高松市内全体で盛り上げていただきたい。また、先ほどのれいがん茶屋は拠点施設の隣であるが、施設の整備を受けて、店主も多くの投資をしながら新しい建築を作られているようである。施設の設計士と同じ方が作られていたはずなので、そういう意味では、屋島が重要な場所になっていくのではないかと非常に期待している。

【委員】



事務局に質問だが、例えば屋島も塩江も、税金の公助が入っているが、やはり時代も令和に代わって、公助でいろんな事業やプロジェクト、公共的施設整備を実施していく中で、外部の投資がどれほど入ってくるのかというのは、非常に興味のあるところである。盆栽も同じだが、公助ではなくて、共助か自助の投資をしていかないと、次の時代を迎えられないというところで、塩江と屋島の可能性というか、今のお話を伺っていたら投資の気持ちも出てきたので、その辺りはどうか。

#### 【事務局】

民間企業の投資を誘発するような取組はどうかという御質問だと思うが、屋島は拠点施設を含めて、ここ3年ぐらいで色んなハード整備を集中的に実施している。屋島の活性化基本構想ができたのは、平成25年の1月だったと思うので、5年、6年たっているが、ようやくここにきて集中的にテコ入れをしている。テコ入れといっても、何か大きなものを次々に作り出すということではなく、むしろ、景観をきれいにしましょうとか、今までできなかったことをちゃんとしていこうというレベルであるが、それをやることで今起きていることとして、先ほどお話しいただいたように、拠点施設の整備予定地の隣の飲食店が、自らリニューアルしようと思われて実際にやり始めるという動きが起きた。それは、やはり拠点施設というプロジェクトが立ち上がらなければ、起こらなかったことだと思っている。あと、屋島周辺のいくつかの民間の観光関連施設が、リニューアルするという動きが出てきている。さらに、JR四国が、屋島駅周辺にゲストハウスを作ろうという検討をし始めたというような報道もあったかと思う。今までの屋島の民間事業者の動きは、どちらかという辞めていくということが多かったと思うが、ここに来て新しい投資をしようという動きが見られている。それらは、我々が最初から狙っていたことではなく、結果として、そういうことが起きているということだが、非常に大事なことであり、我々としても学んでいるところである。塩江に関して、まだまだ、これからの可能性だとは思いますが、おそらく、同じようなことを期待してもいいのではないかと考えている。何でもかんでも行政が事を起こせば、民間が付いてくるからやればいいということではないと思うので、その辺りはしっかりと見極める必要がある。それでも大事にしないといけないものがあるわけで、例えば塩江だが、市内でも自然が残っていて、市内に貴重な水だとか空気だとかを供給しているエリアは、塩江が中心的なエリアだと思うので、そこがこれからもそうあり続けるために、どうすればいいのかという手法の一つが、観光とか交流人口の拡大などと思っている。これからも大事にしないといけないものについて、観光とか交流人口の拡大などという手法を使って、もし持続できるのであれば、行政がしっかりとやっていく。それに呼応して、民間企業がお金なり人を出してくれる、そういうふうないい流れが、結果として作ればいいと思っている。計算してそれはできないと思うが、少なくとも我々の考え方とか物事を決めたり判断したりするときに、そういうことが大事であると思いつながら仕事をしていきたいと思っている。

#### 【会長】

屋島については、しばしば、この審議会でも議論になってきたところで、先ほども発言があったが、大学の小さなプロジェクトであるがそれが4年を迎えてど

んどん進化している。そういったことも周辺の施設に良い効果を与えているのだろうと思う。事前回答がもう1件出ているが、回答委員が本日は欠席なので、事務局から紹介されたい。

【事務局】

内容としては、「今回、改めて推進ビジョンの中に海の項目がほとんどないと改めて感じました。瀬戸の都は陸だけか？海と対面するプロジェクトがあってよいものではないでしょうか。実績を見ても3年前の瀬戸芸の際は各実績もアップしています。瀬戸芸は瀬戸内海がなくては出来ないイベントです。その瀬戸内海がほとんど出てこないのは改めて疑問です。先週今週とヨットハーバーで海プロジェクトが開催されています。海をキーにした行事がもっと多く出る事を期待しております。」とのことである。

【会長】

御本人がいない中ではあるが、この提案に関連して思い当たることがあれば、どなたでも御発言いただきたい。また、今回、事前に回答しなかったが、普段考えているところがあり、ぜひ発言しておきたいということがあれば、お話しいただきたい。まだ、発言のない委員の方からも、自由にお話しいただきたい。

【委員】

弊社の事業で、今、インバウンドというところを非常に多く取り扱っており、高松市の運営で疑問に思っているところがある。先ほどの大学の取組でもそうだが、デジタルマーケティングというところが、一つ、高松市の中で今後課題になる部分になるかと思っている。インバウンドに関して申しあげると、言語のところもあり、いろんなマーケティングをして、いろんなプロジェクトがすごく丁寧に作られている中で、周知・告知という部分が、これから、より力を入れていかないといけない部分かと思っている。事務局へ質問だが、デジタルマーケティングに関して、どのような方法をとられているのか。

【事務局】

御質問のデジタルマーケティングについては、3年ほど前のG7香川・高松情報通信大臣会合に併せて、商店街や駅、空港等にWi-Fiを設置し、Wi-Fiの利用によって、ビッグデータという規模まではいかないが、インバウンドの方であれば、国籍等のいろいろな情報が収集できるので、そういった情報に対して一定の分析を行い、どこの国の方が来られたのか、どういう行動をしているのかという、といったことを分析して活用しようとしている。当然、Wi-Fi導入によって、受入環境の向上も図ることとなる。また、昨年度辺りから本市でも「スマートシティ」を目指す取組として、レンタサイクルが海外の方もよく利用されており、主に商店街や栗林公園への交通手段として利用されているようであるので、レンタサイクルにタグをつけることで、国籍等のデータを取得した上で、アジア系や欧米系の方々はそれぞれどういう移動をしているのか、滞在時間はどうなのか、というデータを採取している。現在のサンプル数はそこまでの数のようだが、それを蓄積していくことで、観光戦略としてどういうことをしていけばいいのかということに使うことができる。あと、民営化された高松空港やイ

ンバウンドで一緒に取り組んでいる香川県からも取れるデータを取りながら、データをマーケティング的に分析していく。ただ、スタートしたばかりなので、今は十分なデータではないが、これからスマートシティを目指していくためには、今後、重点的に取り組むことによって、高松を訪れる方にとって、環境プラスおもてなしの向上にもつながっていく。御提言にはそういったところまでも含まれていると思うが、我々としても、そうすることで、リピーター化につながっていくということは特に感じていることである。

#### 【委員】

私どものNPOは、2007年から海ごみの調査やビーチクリーンアップの活動もやっている。最近では、ペットボトルを捨てるのを止めようということで、給水スポットを作ろうと、うどん屋で給水できるようにするという取組をして、先日も表彰をいただいた。アーキペラゴのコンセプトとして、「小さな島が僕らの未来図だ」ということで島を未来に見立てて、今、どんなことが起こっているのかという視点で、今回、瀬戸内国際芸術祭の春会期にカフェのお手伝いをしたりしたが、1回目と4回目とで感じることは、ごみの量がすごいということ。高松からコンビニのごみを持ってきて、島で捨てているというようなことが起こっている。せつくなので、観光公害という点で、京都のお話をお伺いできればと思う。この創造都市の話とごみ問題は一目違うように思うが、実は裏返しの話なので、2010年の時には港から島に行く方々に、ごみを持って帰ってくださいなと袋を渡しながら、その掛け声をかけていた。今も日本のお客さんにそんな掛け声をかけているが、なかなか海外率が増えてくるとその辺りがおぼつかなくなる。なんとか、創造都市・高松らしい素敵な解決方法を議論にしていなければと思う。

#### 【会長】

私の知っている範囲でお答えすると、今、インバウンドというのは日本全体で一律に海外から旅行客が来ているということではなくて、特定のところに集中する傾向がある。かつては爆買いだったので、例えば大阪が多かった。ところが次第にそれが成熟化してくると、文化を楽しむようになり、そうすると文化的要素が高いところに来る。だから、京都や金沢は世界中から見ても、相当にレベルが高いものがある。それが今は、一般市民の日常生活の質を下げるのではないかということになってきている。この傾向は、世界の観光都市であるヴェネチアやバルセロナでも同じで、バルセロナはそれを見越して、ホテルの出店を減らすように計画を組み替えた。京都もそれに向かっていくが、ごみの問題でいうと、京都の祇園祭の宵山というものがあって、何十万人も来る祭りでもたくさんごみが出る。今年は「ごみゼロ作戦」ということで京都市が呼びかけ、それは相当効果があった。夜店が無秩序に出店していたので、事前にコントロールした面も効果があったようである。私は現場に出ていないので、どういう方法がよかったか具体的にお話することはできないが、とにかく、これまでと違う取組を行政がやるようにした。これは、大きい成果だと思う。そして、そのために経費が掛かるわけで、いわゆるホテル税というのが導入された。高級なホテルには、たくさんお金を払ってもらわなければならないが、やはり、観光に伴う外部不経済が出てくるので、それを減らすために協力してもらい、そのための財源を得て、様々な政策を展開す

る。この傾向は、金沢市もやっている。だから、インバウンドで万事がオッケーということではないので、負の側面も必ずある。そうすると、それを見越して、どういう政策を先取的になっていくか、そのための経費をどうするかということも含めて実行していく。それと、これはおそらく都市計画の問題にも関わってくるので、様々な規制も当然出てくる。瀬戸芸のようなものは、時期が限定されているので、その時期に合わせて特別体制をとる。それは、ボランティアだけではできないとしたら、そのための予算も組むという話も出てくるだろうし、その財源は、市民の一般の税金というのではなく、例えば、海外から来る、あるいは、他地域から来る方に協力を求めるということもあるかもしれない。

#### 4 その他

##### 【会長】

それでは、まだ発言いただいていない方から順に、御発言をお願いしたい。

##### 【委員】

毎回、資料を見て思うのが、とにかく高松はすごいということ。いろんな方がいろんな方面で、高松をより暮らしやすく、より良いところにしていこうとしているところに感銘を受ける。毎回、申しあげていると思うが、私のように外国から来て高松に住むようになる人にとって、ここにいる高松の人にとって住みやすいまちであれば、我々にとっても住みやすいまちになる。観光として来る人に対して、また来てほしいと思うのであれば、資料に記載のあるような取組はどれもすごく興味深くて面白いと思う。今、私自身がネックとして感じているのは、言葉の問題で、発信力がまだまだ足りないのではないかと思う。これも、予算の面で高松市にとってすごく難しいと思うが、既に外国に住んでいる外国の方の中でも高松を自分の故郷のように思っている人がいるので、その人たちの力を借りて、もっと発信出来たら良いだろうと思う。もうちょっと魅力的な言葉で、それぞれの取組や高松の良さ、またSDGsの話もすごく共感できると思う。いろんな国の人も、高松市がそういう考え方でこの計画をいろいろ進めていくのであれば、我々のような人たちにとっては、すごく協力したいと思うのではないか。

##### 【会長】

いつもながら、言葉の問題は御提案いただいて、それをどう具体化するかというところに課題がある。少し進んでいるだろうとは思う。

##### 【委員】

全体的には、高松市でたくさんのごことをやられているなといつも感嘆している。どの分野からいってもたくさんのごことがあるが、それ以外のところでも本当にたくさんのご取組がされていて、それを指揮的にやる人たちが少なくともいることは、すごく幸せなことだなという感じはしている。先ほどの御意見からいくと、今、我々が直面している大きな問題は、多文化をどうするかということである。これを、今後、高松が30年、40年と続いていく時に、取り組んでいかないといけないのは、言葉の問題もあるが、言葉よりもっと重要なことは、生活のスタイルだと思う。その文化の暮らしをどういうふうに乗っ越えていくのかとい

う、そういう視点をどこかに入れていかないといけないのではないかという感じがする。

それと同時に、もう一つは、今日も色々なお話を伺っている中で、多分、ここで生活している生活者がいろんなことをやっているが、やっているお互いのものがあんまり知らないというか、なかなか知り合えていない。ある意味で、そういう機会がいろんな形で作られているが、どういう構造になっているのかほとんど知らないまま過ぎてしまっている。それをお互いが知るような仕組みのような、我々も、年に何回かこうやっていると色々な話を聞き、勉強になっているが、もう少しそういうのを重ねて情報を交換していくと、もっと面白いものが出てくるのではないかという感じはしている。これは、時間的な制限とか場所の制限とかいろんな問題があるが、そういうものがどこかでできるような構造ってできないのかといつも思う。ここで、いろいろと資料をいただいて、今回はちょっと字が小さくて読むのが大変だったが、それでも読んでみて、こんなにたくさんのことを行っているということを改めて感じた。そういうものをお互いに共有できる場というものが、やっぱり必要なのではないかと改めて思った。それが、どういう形で出来るのかというところを考えないといけない。文化芸術の領域ではその辺りの話をずっとしてきていて、今、活動されてきている方それぞれの活動が、特にまちなかのアート活動は相当面白いものが出来上がってきている。それに関わる人たちと、それからそこにまだたどり着いていない人あるいは別の活動を行っている人たちとの連携というのが、やはり実際的にはまだまだこれから必要だろうと思う。まず、プラットフォームに早く乗って、それを少なくともそれをお互いに認識できるようなそういう環境づくりというのが、そういうのをやっていかないといけないのではないかと思うし、それでジャンルが少し違っていくと、なかなかその出会いができていないこととその辺りをどういうふうの実現させるのかってということが、一つあり、多文化の問題をどういうふう到高松市が先頭を切っていけるのか、それが必要ではないのかと思った。

#### 【会長】

多文化共生の問題は、今年の4月に、政府が外国人労働者の方を受入れの枠を広げたことから、日本人の割合がだんだん下がっていくという傾向が、どの地域社会にも起こってくる。例えば、創造都市でいうと浜松のように、もともと日系ブラジル人のような方々が多いところは、早くから多文化共生といわゆる社会包摂、ソーシャルインクルージョンをテーマにしてきたが、いよいよその割合が高まろうとしている。今、高松の創造都市は、スタートの時点では6つから4つのプロジェクトにまとめたが、もう一つ、また柱を再編成するということは必要なのかもしれない。あとでお話しいただくが、U40のアイデア提案の中にもある。従来、日本の行政は人口減少社会という枕詞にずっと慣れてしまったが、それはちょっと違うのではないのかと私は思っており、人口の多様化というか、外国からどんどん人が増えて来て、大事な仕事が担っていくという社会のイメージを持っておかないといけない。そうすると、その文化多様性というものがもっと創造都市にとって大事だという話が逆に出てくるのではないかと思う。

#### 【委員】

今日のような多様なジャンルの方が大勢参加される会議は、とても貴重な機会

である。ただし、時間的には議論の幅に制約がある。会議の前の30分間くらいでも、幾つかのグループに分かれ、混成グループでワークショップ形式をとって意見交換が出来れば、新たな活動が生まれてくるかもしれない、と皆さんのご意見を先ほどから聞いていて感じた。

それ以外のこととしては、ごみ問題について人々の意識を啓発するような事例をいくつか情報提供したいと思う。京都の祇園祭宵山には屋台が出て、毎年夜中には専用ごみ箱から溢れ出したごみに悩まされてきた。今年は分別を細かくし、箱の前にボランティアの若者が立って声かけをすることで、その様子に変化があったようである。捨てる側の意識を変えることも大切だ。他にも、毎秋に東京で開催されるデザインイベントでも、プラスチックごみを減らすために、自然由来の素材を使用する試みを積極的に実施している。高松市内の高校生、大学生によるアイデアコンペのような場を設けていくことも、創造都市に向けて市民意識を高めるクリエイティブな選択ができるのではないかと思う。

また、私自身の専門の芸術に関することでは、高松で伝統的に盛んな工芸についてだ。この会場に来る前に立ち寄った高松市美術館では、2階の特別展示には来場者があるのだが、1階の地元ゆかりの工芸作品の展示室には来場者が少ないことを目の当たりにした。現代工芸として展示された作品も、制作年は30～50年前のものであった。スペインの革製品のメーカーの「ロエベ」が開催する「ロエベ ファウンデーション クラフト プライズ」は今年3回目になるが、今年は日本の若手作家の漆工芸のオブジェが大賞をとり、その評価は逆輸入的に日本でも改めて評価を高めることになった。東京でも巡回展が開かれており、国際的な賞の受賞により、日本の漆工芸の新しい側面が注目されることになった。佐賀県の有田市では、有田焼が斜陽してきた中で、オランダと日本の友好交流400年を記念する事業をオランダ大使館が仕掛けた。オランダからデザイナーが来日し、有田の優れた伝統技法をとり入れ、有田焼を再発見する機会を作った。高松市においても、海外の巡回展の誘致や、国際交流などのさまざまな交わりにより、ここにある文化資源を掘り起こし、その良さをアピールすることにつなげていけるのではないかと思う。

#### 【会長】

祇園祭の宵山について補足いただき感謝する。それから、工芸の新しい生き方が世界的なものになりつつあるということをお話いただいたが、その取組は、ロエベ財団の理事長が国際的な工芸のアワードを世界に呼び掛けて始めてから3回目となる。日本の作家の方も、もちろんその中に登場してきている。高松市は、金沢市の取組をウォッチしてきているが、金沢ではそのロエベとの関係性で既に動いている。金沢市は、世界工芸トリエンナーレということもやっているし、工芸アートフェアということもやっていて、伝統工芸だからといって守りに入るのではなく、工芸未来派というか新しい工芸を作っている。それで世界の中で出てくるアートと工芸の新しい流れというのを追いかけるということをおそらく日本で出来るとしたら、そんなにたくさんの都市に可能性があるわけではないので、高松市の工芸のビジョンをもう少し世界的な視野から練ることがあってもいいかと思う。

#### 【委員】

グローバルの話ではなく、身近なところの話をしていただくと、以前も少しお話させていただいたが、学校巡回教室の数はそんなに減ったりはしていないが、やはり、邦楽とか民謡といった部分には、全く声が掛からなくなってしまって、最近では歌が多いということを目にしている。なぜ、そのように偏るのかと聞いたところ、学校の先生もやはり音楽でも洋楽の先生がほとんどなので、そこを掘り下げて生徒たちに体験させたいのではないかと、ということを目にしたことがある。洋楽というものは、身近に感じる音楽で、普段、日常でも触れることがたやすいと思うが、なかなか邦楽とか日舞といったものは触れる機会が少ないようで、私たちのように邦楽のことをやっていたら、普通のことと知っていることでも、意外と小学校で体験教室をやったりするとこんなこと全然知らなかったという声をたくさん聞くので、是非、学校巡回教室に邦楽とかにも携わっていただき、学校巡回教室に呼んでいただければと思う。

あと、私も屋島住民なので、先ほどの屋島の話について資料を見ても、こんなに多額の投資をしていただいております、他にもまちがある中で、こんなにもクローズアップしていただいていることは本当にうれしいが、実際に、屋島山上でやるイベントに地元の人が行っているかというあまり行ってない傾向があったりする。ただ、地元の中でも屋島をよくする会とか、屋島を元気にする会とか小さい団体が、それぞれに屋島を良くしようと動いている人は意外と多い。そういう人たちと市の方が、うまく接点を持っていただいて、一緒に協力して何かをやるともっと屋島も活性化するのではないかと、ということがある。実際、私も屋島に登り、提灯カフェにも行ったが、屋島山上からの景色は良いなと思うが、実際にお金を落とすところがないとかお店もほとんど閉まっていたりするので、カフェもなく自動販売機しか使うところがない。せっかく、たくさんの人に山上に登ってくれているので、もっと何かがあればいいなということをお話の話を聞いて思ったところである。

#### 【会長】

学校教育の中に、伝統文化をもっと増やそうと、これは文化庁も最近伝統文化とか生活文化に対する取組を強めようとしており、学校教育との連携も視野に入れているので、是非、高松でもやっていただきたいと思う。

#### 【委員】

私は元々香川県の出身ではなく、愛媛県の出身であるが、香川県というところは四国四県の中でいわゆる文化活動がすごく盛んな県であると私は感じているが、盛んであると思うが、それはやはり、限られた日時に限られた空間に行って初めて経験できるという類いのものではないかと思っている。瀬戸芸が始まってから割と島に行くと、自分で自由にいろんなアート作品を経験できる触れることができるようになったが、まだまだ、例えば、生活の中に文化というものが入り込んでいないのではないかと思っている。一歩外に出たら、そこに何か文化というかアートに触れる機会があるというか、そういう経験ができるようになれば、市民の心が豊かになってくるのではないかと思っている。何で見たか失念したが、ごみを捨ててあるところに缶を集めて、それをドラムセットにしてリズムを叩いている音楽家がいて、そういった何も無いところから創造するのではなく、何かあるものを如何にして有効に使うかという視点からアーティストが誕生して

いるというような話も聞いている。高松でもそういったことができたならもっともっと発展していくのではないかと思っており、あるいはこれは著作権の関係でいろいろと問題の多いと思うが、何かできる範囲で動画を取って世界に向けてYOUTUBEで発信するかそういう手段を使うなど、香川県の魅力を伝える方法として何かいい方法があればと常々思っている。

【会長】

一通り御意見をいただき、これを個別に事務局から回答いただくのは難しいと思われるので、全体的にこれからの課題として受け止めていただきたい。それでは、U40の取組について事務局から説明をお願いしたい。

【事務局】

第4期U40では、「役所の変革の火種」として、U40委員から本市の創造性を高めるアイデアを御提案いただき、アイデアの実現に向けて関係部局との意見交換を行ったところである。全40アイデアのうち、6アイデアが、今後、実現に向けて進んでいく予定であり、個別に御説明すると、1つ目の「ことばのバリアフリー」は、観光交流課都市交流室が「やさしい日本語」の基本知識を身につけるための職員研修の実施を検討している。2つ目の「小中高校生向け 観光ガイドチャレンジ」は、観光交流課が今年度から実施している「高松外国人観光客お助け隊」の中での実現を検討している。3つ目の「高松を障がい者スポーツのメッカに！」は、スポーツ振興課が東京オリパラに向けて、市民レベルでの機運の醸成につながる手法での実現を検討している。4つ目の「工芸×島の食」と5つ目の「伝統的工芸品の印刷物づくり」は、産業振興課が「たかまつ工芸ウィーク」でのイベント開催や、「職人に焦点を当てた紹介」を中心に、市HP等での発信を検討している。6つ目の「ソーシャルインクルージョンの場に文化施設を活用するための職員研修」は、文化財課が「ソーシャルインクルージョン」についての職員研修の実施を検討している。来月の8月28日には、市長・副市長に対してプレゼンを行い、予算の伴うものについては、予算要求に動いていく流れとなっている。

【会長】

委員の中から御意見も出たように、2時間という制約があるので、もう少しワークショップとか別の形式での議論をたっぷりできるような方法も考えてほしいということと、私も常々、市役所の中だとどうしても考えが煮詰まるので、今日は高松を代表する丸亀町商店街の空間を使わせていただいているが、今後も是非、クリエイティブなアイデアが湧くような運営に御協力いただきたいと思います。

【事務局】

本日は皆様方の貴重な御意見とアイデアをいただいたので、先ほども会長からおっしゃっていただいたように、我々としてもいただいた御意見を来年度の事業の予算化に向けて、実現できるものと参考にさせていただくものと検討したうえで進めてまいりますので、引き続き、皆様方におかれては、この会に限らず何か御意見やアイデアがあれば、事務局に御提案いただきこちらで検討させていただいて、「創造都市・高松」の実現に向けて、当然、我々だけでは実現できないの



で、皆様方からの御力をお借りする中で推進していくことで、市民を含め、高松に来られる交流人口や関係人口の方々に高松を気に入っていただけるようなまちにしていきたいので、引き続きよろしくお願ひしたい。

【会長】

最後、委員から御報告があるようである。

【委員】

「求む未来の内装職人 職人育成塾」ということで、現在、高松の塩江の小学校をお借りして、第7期の募集に入っている。第6期では16名のものが、毎日、朝9時から夕方4時まで技術の訓練をしているところである。内容を申しあげると、まずこれは、厚生労働省の支援事業であり、5年間限定で厚生労働省として建設業に携わる人たちが若い人が減って高齢者が増えており、将来的には100万人ほど足りないと言われているので、5年間限定で年間で1,000名、全国で職人になるような人を育成しようと国家予算でやっており、今、全国で24か所。北は北海道から南は沖縄まで、四国では香川の我々と高知にある。我々は建築の内装の仕上げをする職人の育成をする。それも職人になりたい人ではなく、今までいろいろなことをしてきたが何をしたいかわからないというような人たちに様々な職種を経験してもらい、その中で自分のやりたい仕事を自分で見つけさせる。見つけたところに就職をさせるという仕組みで、決して訓練だけではない。最終的には企業まで紹介するというをやっており、現在まで97名が卒業できており、その中で女性が18名入っている。そのほとんどが就職できている。これは香川県だけでなく、今回も東京、広島、愛媛からも来ている。そういう意味で何をしたいかわからない人たちに、建設業に興味を持ってもらい就職するというを2か月間かけて年2回やっている。今回がちょうど5年目で、今回の募集が最後のメンバーを集めている。塩江でこういうことをやっているということを御理解いただき、周囲に興味を持ちそうな人がいれば御紹介していただきたい。現在、15歳から50歳までの非常に幅広い方々が来ている。

5 閉会